

2025 年グローバル・スタディーズ研究科研究助成金 報告書

課題名：トルコにおけるアレヴィーの同化政策の持つ他者化機能：ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念祭を事例として

グローバル・スタディーズ研究科 地域研究専攻 博士前期課程 2 年

谷山 瑠

1. 調査目的

本調査の目的はトルコ共和国の宗教マイノリティであるアレヴィーに対する同化政策のもつ他者化の機能をハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念祭を通じて分析することである。アレヴィーはトルコ共和国の人口の 20%ほどを占める信仰集団であるが、スンナ派イスラームとは異なる信仰実践や独自の儀礼実践を持つことからオスマン朝期には「異端」として排除されてきた。一方でトルコ共和国期において、アレヴィーは国民国家の枠組みで「真のトルコ人」として、またその信仰は「トルコ文化」として民族的な同化の対象となった。そうした同化装置の例として政府主導で開始されたアレヴィーの聖者を記念する祭りに着目する。

1925 年に世俗化改革の一環としてスーフィー教団の修道場が閉鎖されたことはアレヴィーにも影響を与えたが、1950 年代の政策の転換によって修道場は政府の管理の下近代的な博物館として再開されていった。同時にアレヴィーの聖者崇敬を非アレヴィーをも巻き込む形で大衆化した祭りが政府主導（特に文化省）で開始され、これはアレヴィー文化をトルコの民俗文化財に組み込むことによるトルコ民族主義への取り込みを意図したものと考えられる。アレヴィーへの差別は社会的なレベルでも政治的レベルでも止まることはなく、国家機関である宗務庁は絶えずアレヴィーを信仰として認めず教育カリキュラムもスンナ派に限定的なものであった。このような信仰としてのアレヴィーの他者化は維持されてきたという点に着目すると、政治性を帯びた記念祭への文化的取り込み政策は同化／他者化という観点からどのような位置づけが可能か、これが修士論文執筆に向けた本調査の問題意識/目的である。そして本調査ではその象徴的な例としてハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念祭に着目する。

2. 調査の概要

本研究の調査対象はネヴシェヒル県ハジュベクタシュ市にて毎年行われるハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念祭である。アレヴィーの聖者祭の中でも最大規模である本記念祭は 1964 年に始まり、1970 年代までアレヴィーによる左派闘争の影響を受けた。その後 1980 年後半は政治家による集票の場となり現在までトルコ政治と密接につながる政治性の高い祭りである。特に 1990 年代以降アレヴィー・アイデンティティの規制緩和に伴ってアレヴィー組織が急増し、こうした市民社会のアクターも加わったことで祭りの政治的な構造が複雑化した。そのため祭りに参加するアレヴィー組織にも聞き取りを行うことで祭りの構造図を描くことに努めた。

記念祭は 8 月 16 日から 18 日の 3 日間にかけて行われるが 12 日からハジュベクタシュに入り、関係者や市民への聞き取りや調査準備を行った。記念祭では①与野党の政治家の演説や聴

衆の反応②儀礼場所に集まる参加者③アレヴィーを「トルコ文化」へとりこむ装置である博物館の3点を調査する予定であった。

それ以外の日はイスタンブール（8月4日～7日、8月28日から9月1日）、アンカラ（8月7日～12日）、シヴァス（8月18日～21日）にてアレヴィー組織への訪問とインタビュー、図書館での資料調査を行った。また8月22日～27日には調査協力をしてくださったアフメト・タシュグン先生（ハジュ・バイラム・ヴェリ大学アレヴィー・ベクタシ文化専攻教授）のコンヤにある自宅に滞在し、文献探しや修士論文の相談、ノートをまとめるなど行った。

3. 調査結果

3.1 2つの祭り：「伝統的な」記念祭と「代わりの」祭り

本調査で対象とする記念祭はアレヴィーにとって聖者廟への参詣などの信仰としての側面がある一方で開始当初からみられる政治的側面も政府がアレヴィーをどのように認識するのかわかるうえで重要である。2020年以降は与党による祭りへの干渉が強くなったことでアレヴィー問題を軸にしたトルコ政治の様相を記念祭を通じて理解することができると考えた。

①「伝統的な」記念祭＝「ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念祭と文化・芸術プログラム（Hacı Bektaş Veli Anma Törenleri ve Kültür Sanat Etkinlikleri）」

1964年にアレヴィーの議員や歌手などの声掛けによってハジュ・ベクタシュ・ヴェリ博物館の再開と同時に本記念祭は始まった。1980年に起きた軍事クーデタまで当時数少ないアレヴィー組織であったハジュ・ベクタシュ・ヴェリ文化協会が委員会を設置し主催をしていた。しかし、当時はアレヴィーに対する社会的・政治的抑圧のためアレヴィー信仰ではなく「トルコ文化」をアナトリアに運んだ聖者を記念する祭りとして開かれていた。1984年の民主化以降現在まではハジュベクタシュ市による開催、1989年以降は文化省の干渉が強くなっている。

2024年5月にハジュベクタシュ市主催で行われた会議では市と文化省、多くのアレヴィー組織が共同で祭りを運営するという取り決めがなされた。この会議に参加したアレヴィーヴァークフ連合の役員メフメト・アリー・アイユルドゥズの話によれば、この2日後アンカラにある文化省にこの会議の結果を報告しに行ったが、ハジュベクタシュ市や政権に反対するアレヴィー組織らが来なかったという。さらにあとから聞いた話では当時イスタンブール大都市圏市長であったエクレム・イマムオールがこの市や組織に文化省への訪問をしないよう提言し、代わりに彼の所属する最大野党共和人民党（以下 CHP）とハジュベクタシュ市がともに祭りを5年間共同運営する議定書に署名したという。そのため今回の記念祭にも CHP 議員が多く参加していた。

8月16日の18時からなされた式典挨拶にはヨーロッパ・アレヴィー統一連盟代表ヒュセイ・マト、2025年3月のイマムオールの逮捕によりイスタンブール大都市圏市長代理を務めるヌリ・アスラン、CHP 党首オズギュル・オゼル、クルド系政党である人民の平等と民主党（以下 DEM）共同代表トゥンジェル・バクルハンがスピーチを行い、国内外のアレヴィーの連帯を強調した。同様に拘留中のイマムオールからの平等を主張するメッセージも読まれ、彼らのスピ

一チは大きな拍手と歓声に包まれていたことを確認することができた。

②「代わりの」祭り＝「ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ記念プログラム (Hacı Bektaş Veli Anma Etkinlikleri)」

先に述べたように 2020 年以降イスラーム主義を掲げる与党である公正と発展党(以下 AKP)と民族主義者行動党(以下 MHP)によるアレヴィーに対する政治的接近がなされた。例として 2021 年に聖者ハジュ・ベクタシュ・ヴェリ生誕 750 年を記念して 2012 年以降申請されているハジュベクタシュ市の複合施設の世界文化遺産への登録を推進すること、2022 年に文化と観光省傘下に作られたアレヴィー・ベクタシ文化とジェムエヴィ庁を挙げることができる。

同時に祭りへの干渉も始まり 2020 年ごろから 8 月 12 日と 13 日に文化と観光省による「代わり」の祭りが行われており、8 月 12 日にアンカラを出発する 3 台のバスの一つに乗ることができた。これらのバスはアレヴィー組織を介して配備されたのではなく、すべてのバスや宿泊施設が文化省によって賄われていたという。まずはアンカラから 1 時間 10 分ほどにありバルカンにおけるアレヴィー信仰の伝播に重要な意味を持つハサンデデ廟へ参詣し、そこから 2 時間ほどかけてハジュベクタシュ市に到着した。市内に入ると MHP 党首デヴレット・バフチェリが建設を進めている大規模なジェムエヴィに案内され、その後参詣や食事などをした。この祭りに参加していたバスはアンカラのみならず、イスタンブル、シヴァス、マラティア、チャンカヤ、エルズインジャンから 20 台ほどが確認できた。

祭りのプログラムが行われるメインステージに入るためには入口にて厳密なコントロールがなされており、バスのツアーへの参加者に配られる首掛けのカードがないと入れないシステムであった。このシステムのためカードを持たない地元住民や参詣者によって入口前はあふれかえり一時小さな抗議まで発展する様子を確認できた。18 時半から本格的に始まったが、食あたりと体調不良によって参加することは叶わなかった。オープニングセレモニーには副大統領ジェヴデト・ユルマズや文化と観光大臣ヌリ・エルソイが参加し、党首レヴェルの政治家は参加しなかったという。

このように特に 2020 年以降は、片や「伝統的な」記念祭を行う野党 CHP とそれに追従する DEM、片や「代わり」の祭りをを行う与党 AKP と MHP 間との対立と、双方のアレヴィーの政治的取り込みが各々の方法で激化していることが理解できた。

3.2 人々の語り、市民組織から見た記念祭

ハジュベクタシュでは祭りに参加する人々への聞き取りインタビューを行い、それ以外の都市ではアレヴィー組織に聞き取りを行った。

ハジュベクタシュに着いて最も驚いたのは中心部にロマ(Çingene)と呼ばれるインド起源の放浪民が中心部を埋め尽くしていたことである。話によると彼らは東南部や南部のクルド地域に定住し、その一部はアブダル(Abdal)と呼ばれる物乞いをしながらハジュ・ベクタシュ・ヴェリに結びついた人々であるという。彼らは道に張ったテントや車で生活し騒音や喧嘩の要因となっており、現地住民はこうした状況に不満を漏らしていた。1994 年から 2004 年までハジ

ユベクタシュの市長を務め政府との協調関係に努めたムスタファ・オズジヴァンへのインタビューでは、1992 年ごろから彼ら専用のキャンプを用意していたが現在そのようなものはなくなってしまったという。祭りには多くの警察が動員されており、彼らがロマの人々を立ち退きさせたり犬のように追い払ったりする様子を確認することができ想像していた神聖なる「聖者祭」とは異なる雰囲気醸成していた。

現地に住む人々はこうした治安の悪化と祭りの政治化についても不満を漏らしていた。ハジュ・ベクタシュ・ヴェリを先祖に持ち現ポストニシン（修道場のトップ）であるヴェラツィエティン・ウルソイ（83 歳）は、同様に現在の祭りの政治化を憂い何年も参加すらしていないという。交通機関が発達しておらず祭参加者も限定的であった時期（特に 1980 年クーデタ以前と推測）は祭りに来た人は地元民宅にホームステイしたり自家用車で寝泊まりしていた。こうした初期の記念祭を昔のものとして回顧する姿を見ると、人々がこの近代的な記念祭を新たなアレヴィー「伝統」と認識しているのかもしれないと感じた。

4. 反省、今後の課題

本調査での反省点は体調管理不足によってイベントや儀礼、パネルなどを含む記念祭の参与観察を十分に実施できなかったことである。また、調査協力をしてくださったタシュグン先生のお助けにより多くの人々からお話を伺う機会を得ることができたが、インタビュー時間が短く質問項目を厳選せざるを得なくなった。初めての現地調査であり実現可能な範囲での実施ができなかったことは反省点といえる。

本調査で収集した文献、インタビュー記録は修士論文執筆に活かしていく。特に「他者化」という観点からみると、政党やアレヴィー組織による祭への関与と政治化が普段見られることのない現地住民の他者化・周縁化につながっているのではないかと考えた。また、アレヴィー組織への聞き取りによって政権派組織と非政権派組織との間にも「誰が真のアレヴィーなのか」という問題にはそれぞれの立場があることが分かった。記念祭の言説空間において政治家やアレヴィー系の著名人が言及する「我々」には誰が含まれていて誰が「他者」として描かれているのかより深い洞察が必要である。先行研究やニュース、インターネットでは映らない人々が現地調査によって浮かび上がったことは本調査における非常に大きな成果であったと考えている。

5. おわりに

本調査は、2025 年グローバル・スタディーズ研究科研究助成金の受給により実施することができた。指導教員である澤江史子先生、事務手続きにご尽力いただいたグローバル・スタディーズ研究科事務室の方々、現地での調査に手厚く協力してくださったアフメト・タシュグン先生にこの場を借りて深く感謝申し上げます。